

## 「文明開化」とは

開化因循興廃鏡一

「文明開化」は、これまで「西洋文明」の一方的な移入の政策、およびそれにもなっている現象として説明されてきた。江戸時代までの日本は封建社会であり、そのもとの文化が営まれていたが、開国と維新により、あらたに「西洋文明」が入り込んできた。とくに明治政府は、富国強兵の掛け声のもとで近代的な中央集権国家を築きあげるため、積極的に「西洋文明」を導入し、それを移植しようとしたという歴史像である。

教科書などでは、国民教育のための学制をはじめ、鉄道の敷設や電信・電話、郵便制度の整備を挙げ、さらに太陽暦や一週間の導入で日曜日を休みとする習慣をとりあげ「文明開化」の内実として説明している。また、旧来の身分制度を廃止し、平民も名字を名づけることができようになり、断髪令、廃刀令など古い習慣の廃止を行ったことを記すとともに、衣食住の変化にも説き及ぶ。灯りがランプからガスへと移り、建築も木造から石造りがみられ、衣服は和服から洋服となり、さらに肉食の解禁がなされるなど、人びとの生活のなかに取り入れられ変化を促していった「文明」が多く掲げられ、話題には事欠かない。

また、銀座煉瓦街を例にあげることにより、レインガ造りの洋館がたち並び、舗装された街路に並木があり馬車が走る街並みを示し「西洋化」を仔細に説明している。こうした文明開化の把握は、

しばしば風俗面での解釈が先行していたが、日本の近代化——近代文明と近代生活の開始と重ねて論じられていた。

こうした把握に対し、1970年代ころから、二種類の方向での修正が出されてきた。第一は、「文明開化」の裏側である。西洋化された銀座煉瓦街の反対側には、旧来の江戸の町並みが残っており、これまでの生活形態が残されていたとの議論が出される。また、第二は、一方的な「開化」ではなく、明治初期には人びとは西洋文明の技法を、従来の技術に接ぎ木していたとの指摘がなされる。とくに建築技術の面で、これまでの建築技法が、洋館の建築に利用されたと主張された。

こうした研究を射程に入れながら、資料「開化因循興廃鏡」を見るとき、まずは、新旧の対立が図示されていることが目につく。「煉瓦」と「瓦」、「散切り頭」と「まげ」、「ランプ」と「かんでら」、「こうもり傘」と「から傘」、「人力車」と「かご」、「帽子」と「烏帽子」、「横文字」と「漢字」、「せつけん（しゃぼん）」と「ぬか袋」、「いす」と「床几」、「牛鍋」と「おでん」などの対抗が描かれている。ここでは、外来のもの（前者）が在来のもの（後者）を圧倒することが擬人化された図像によって示されている。

しかし、より立ち入って見たときには、この資料はそう単純には描かれていないことに目がいく。前者の外来もののグループにも、書き分けがなされており、「西洋」からの移入のもの（ビール、いす、横文字、帽子、ランプなど）は洋服を着ており、その他の和服らしきものを着るもの（せつけん、こうもり傘、牛鍋など）との差異がある。

また、前者と後者の関係も単純な対立ではない。「日本酒」と「西洋酒（ビール）」との対抗は、「日本酒」の後ろに「会席料理」、「ビール」の背後には「西洋料理」がしたがっており、モノを他のモノと結びつけ関連づけて把握している。また、ここでの争いは互角となっている。

さらに、在来のものが勝利を収めている絵柄もある。「日本」が勝っているのは「日本油」（⇔「南京油」）、「日本米」（⇔「南京米」）であり、中国に対しては日本が優位の姿勢を持つように描かれている。なお、「うさぎ」と「ぶた」は、うさぎの飼育を意味し、家畜を凌駕しているとされる。このように、資料に描かれた「文明開化」は単純な新旧の対立ではなく、いくつもの差異が含まれている。

しかし、本資料は、新旧のありようを単なる対立とみてはいないものの、対立を絵柄にすることによる啓蒙を図っている点は押さえておく必要がある。新しいモノの登場の意味を、「民衆」に二項の対立で解釈させようとする点に本資料の意図がある。

挿絵という表現手段を用いていることの意味もここに見出せる。東京という「文明開化」の根拠地の土産品として描かれたこの資料は、「開化」を肯定し、そのために「因循」を排し「興廃」を写し出す（「鏡」）ことを目的としている。「開化因循」の文字が赤字のローマ字で大きく記してあることに、そのことがよく示されている。「ランプ亡国論」など、懐旧的な心情で「文明開化」を描くものもあるなかで、本資料は「文明開化」をあらたなものに進出とする立場を選択したのとなった（日本女子大学教授 成田龍一）